

「初面に想う」  
はっおもて

大島泰子

今から三十年ほど前のこと。長男輝久が「初面」を務め終えた夜、興奮して眠れないまま私に話かけてくるのです。私は催しの準備、後片付けとで疲れていましたが、息子の言葉に相槌を打ちながら聞いていました。残念ながら、その言葉の一つ一つは忘れてしまいました。その時の情景と深い安堵感を今でも鮮明に覚えています。

『能面を付けて能一番を務める事が、この子をこんなにも成長させてくれるなんて・・・この子はこれで、大丈夫！ 能楽師として進んでいくてくれる！』と、それまでの子育ての苦勞が吹っ飛んだのです。

と言いますのが・・・輝久、二才頃の事。

『輝久は物を壊すから、座敷には入れるな！ 稽古場に入れるな！』

輝久、小学生の頃の事。

『学校から帰っても、稽古がすむまで外に出すな！』と、舅の大島久見に厳重注意を言い渡されていたのです。遊びたい盛りの男の子をじっと待機させておく・・・母子での修練の日々が続きました。

今思えば、『孫を能楽師に育てる』という大島久見の執念と情熱から発する言葉の数々であったと。

大島久見は平成十六年二月三日、孫・輝久の結婚式前に亡くなりましたが、その後、家族での会話の中にはいつも「おじいちゃんなら、このことをどうするかな？ おじいちゃんは、これが好きだったよね。」と、大島久見が君臨していました。

そんな会話の中で育った伊織（輝久の長男）は大じいじいと、能面が大好きな子に育ちました。しかし、その後あまりに沢山、子方の舞台に立

つこととなり、「ばあば、ぼく、お能が嫌いになりそう」と、一度だけ言ったことがあります！ でも、よくぞ頑張りました。

この五月十六日、福山喜多会「春の会」にて伊織が能「花月」を（初面）にて務めます。通常より少し早いのですが、伊織のために能面を制作くださった岩崎久人氏に一日も早く舞台姿をお見せしたく計画致しました。また、沢山の舞台をこなして頑張ってきた孫たちへのエールとして能舞台の記録と能アルバムも制作、HPに掲載予定です。

このコロナ禍の時節に試行錯誤の日々が続きますが、お社中の皆様と大島能楽堂をご支援くださいます多くの方々のおかげで大島久見の遺してくれたものを伝えることが出来ていますことに深謝申し上げます。今後共ご支援、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

令和三年（2021）五月十二日 記



261回大島能楽堂定期公演  
舞囃子「花月」大島伊織  
2019年11月17日